

## 大学や高校を中退することの「意味」 学生相談・教育相談・生徒指導場面から考える

著者	永島 聡
雑誌名	神戸常盤大学紀要
号	11
ページ	233-240
発行年	2018-03-31
URL	<a href="http://doi.org/10.20608/00000975">http://doi.org/10.20608/00000975</a>

報告

# 大学や高校を中退することの「意味」—— 学生相談・教育相談・生徒指導場面から考える

永島 聡<sup>1)</sup>

## “Meaning” in dropping out of school - a consideration from the practices of student counseling and guidance

Satoru NAGASHIMA<sup>1)</sup>

### 要旨

高校や大学での相談場面において中退問題が扱われるとき、多くの場合、退学をいかに食い止めるべきかという観点から対応しようとする。しかし、退学はそれほど忌避すべきものなのだろうか。本稿においては、この問題を Frankl のロゴセラピー理論の枠組みから再検討した。そして、当該生徒・学生の人生にとって、中退が意味を持つてくることもあり得るのを確認することができた。

キーワード：大学中退、高校中退、人生の意味、ロゴセラピー、Frankl

### SUMMARY

It is common (in Japan) for teachers or school staff to try to prevent students from leaving school when they are inclined to do so. Why is “dropping out of school” regarded so negatively? This article illustrates the positive sides of leaving school using the frameworks of Frankl’s logotherapy theory and concludes that “dropping out of school” has meaningful aspects in those students’ lives.

Key words: college dropout, high school dropout, meaning of life, logotherapy, Frankl

---

1) 保健科学部看護学科

## はじめに

高校の教育相談・生徒指導現場、大学の学生相談現場において、中途退学者問題は深刻化してきている。

平成27年度高校中退者数および中退率については、文部科学省によると、49,263名、1.4%である。平成12～13年以降、途中統計の取り方が2度変わってはいるが、中退者数、中退率ともに概ね漸減してきていると言っているであろう<sup>1)</sup>。とは言え、これがいまだ重要な問題であることに変わりはない。

大学については、やはり文部科学省によると平成24年度の中退者数および中退率は、79,311名、2.65%である。平成19年度はそれぞれ63,421名、2.41%である<sup>2)</sup>。統計の取り方が高校とは異なり、単純に比較はできないが、大学に関しては中退者数、中退率ともに増えていると言える。また平成24年度における大学中退の理由として、経済的理由(20.4%)、転学(15.4%)、学業不振(14.5%)、就職(13.4%)が上位に来ている(括弧内は中退者の中でそれぞれが占める割合)。

これらの数値は、各高校、大学によって、かなり異なってくる。例えば高校の場合、いわゆる進学校においては、中退者の量的な問題は小さいであろう。またいわゆる教育困難校では、入学時のクラス数が卒業時にはいくつか減っている、ということが十分あり得る。また前者においては、何らかの教育相談的な問題が生じた場合、学校が対応する以前に自ら精神科や心療内科を受診したり、学校外でカウンセリング受けたりするケースは多い。しかし後者の場合、保護者がそもそもそれほど問題意識を持たないケースも少なくない。家族歴等の背景がそれぞれ異なることが背景にあると思われる。そしてこれらは大学でも同様である。有名大学とそれ以外とでは、問題は量的にも質的にも大きく異なる。もちろん、個々の当該生徒・学生によっても、それぞれ事情は全く異なる。

このような中、高校も大学も、いかに退学者を出

さないようにするか、ということがテーマになってくる。例えば大学組織による対応として、経済的理由から中退しそうな学生に対しては、奨学金や授業料減免の制度を充実させ、経済的支援を手厚くするという手段がとられるということが考えられる。また学業不振により中退するかもしれない学生に対しては、リメディアル教育や初年次教育等による学力保障的プログラムが整えられることがあり得る。そしてもちろん、当該学生に対する面談等個別のケアがなされる。高校においても同様である。

もちろん、中退者が多くなれば、高校や大学の経営が金銭的に立ち行かなくなり得るわけであるし、人が減ることはすなわち学校の存在そのものが脅かされ得る、ということにもなる。よって中退者防止のための活動は必要なのであろう。そしてもちろん、当該学生本人も、中退の危機から救われ、今ここでこの学生生活が保障されることは、よいことなのであろう。

しかし、それほど中退は悪いことなのであろうか。「治さなければならぬ」ことなのであろうか。中退を防止できることが成功であり、中退させてしまうことが失敗であるのだろうか。その学生にとって、そのときはドロップアウトに見えるかもしれないが、彼ら彼女らの長い人生の中で、その中退が人生のひとつのステップとして意味あるものになってくるような経験は、あり得ないものなのだろうか。

拙稿においては、精神医学者・哲学者であるFrankl, V.E. のロゴセラピー理論に依拠して、中退の肯定的な意味について考察する。というのも、Franklは人生の意味を問う、実存的な人生観・人間観を問う理論家かつ実践家であるからである。考察にあたっては、高校や大学での相談場面において実際にあり得るケースを具体的に設定し、Franklの思想に基づき検討するものとする。

## Frankl の理論

ここで、中退の意味を検討するためのロゴセラピー理論を振り返る。

### ① 次元的存在論

Frankl は、一人の人間は質的に異なる多様な側面を持っていてなおかつ統一された存在であるということを、「次元的存在論」と呼ぶ幾何学的アナロジーを用いて説明する<sup>3)</sup>。ここで xyz 空間に浮かぶ円柱形のコップを考える。このコップは器として開かれている。すなわち、水で満たすことも酒で満たすこともできるし、水や酒を半分注いでおくこともできるし、空にしておくこともできる。もちろんコップとして使うこともできるし、花瓶にすることもできる。そしてこのコップの xz 平面への投影図は円となり、yz 平面への投影図は長方形となる。これらは図形としてそれぞれ全く異なるものであり、かつ閉じていて、円ないし長方形でしかないような、シンプルな平面図形である。

いくつかの質的にそれぞれ全く異なりかつ閉じたものがあるということと、それらを全体として統合したものがありかつそれは開放的であるということとは、それぞれ矛盾しない、ということである。

さらにここから次のようなことが考えられる。我々三次元空間に暮らす人間は、二次元の円や長方形であれば、それぞれを直観的に把握することができる。しかしながらその一つ上の次元にある立体としてのコップの存在全体を瞬時に理解することはできない。その様々な投影図を種々の角度から捉えることならできる。そして楕円や平行四辺形等々を積み重ね、円や長方形と合わせて、コップに近づいていくことはできる。しかしながらコップそのものには到達することはできない。コップ全体を部分の総和として論理的に思考し捉えることはできないのである。

この次元的存在論を踏まえると、次のようなことも言える。我々に今ここで見ることができるのは、

閉じた平面図形でしかないのであるが、それしか見えないということもあり、それが対象のすべてであると捉えてしまいがちになる。今見えているものがすべて。正しい認識をしていると思い込んでしまう。そもそも思い込んでいるという意識もない。しかしながら、今ここで見えているもの以外にも、全く別の平面図形がいくつもあるのである。自分にとって知る由もない、相手の人間の全く異なる様子がいくつもあり得る、ということである。もしそれらの多種多様な側面を集めることができたとして、それらを合わせれば対象の実像を認識することができる、というわけでもない。我々が考えて考えて相手を完全に理解する、ということとはできない。我々の理解を超えたところに、相手の全存在がある、ということなのではないだろうか。

### ② Frankl の人間観

Frankl は「人生の意味」「意味への意志」「意志の自由」を人間観の三つの柱として設定している<sup>4)</sup>。Frankl にとって人生は、兎にも角にも意味あるものなのである。そして人間には、人生の意味を充足させようとする意志が本来的に備わっているとす。さらに、意味を求める人間は、ある場面に直面したとき、何らかの態度を取る自由を持つ、ということである。

絶対意味のある人生において、意識的あるいは無意識的に自分自身意味を充足したいという意志を持ち、自由意志のもと態度決定することができるのが人間なのである。この人生の意味については、なぜあると言えるのか、その存在を人間が論理的に説明することはできない。あると信じるしかないものであり、もちろんないと信じる自由もあるのであるが、Frankl にとって人生はやはり意味あるものなのである。

### ③ 人生において価値を実現するという事

Frankl 的には、意味への意志のもと自由に態度決定できたとき、人間は自らの人生において何らか

の価値を実現することができる<sup>5)</sup>。何か活動したり創造したり、自然や芸術や人間を愛するような体験をしたりしたときに、価値が実現され得るということである。

この価値は、その実現を目標として、それを獲得しようと意識的に試みることで成就するものではない。何かを創造することや誰かを愛すること等に、無意識的に専心し献身してしまい、その結果、副産物として充実感を持つことができ価値が体現された、といったものなのである。

## Frankl の理論を踏まえて考え得ること

上にあげたような Frankl の理論から中退事例を眺めると、次のようなことが言えるのではないだろうか。

### ① 次元的存在論より

高校や大学において、ある生徒・学生に中退の可能性が出てきたとする。対応する教員は多くの場合、否定的な問題が発生したと認識する。そしてこの問題を解決しようとする。教員は面談をして思いとどませようとするかもしれないし、カウンセラーの力を借りようとするかもしれない。それでも当該生徒・学生は学校を続けようとしなない場合、残念ながら退学となり、関与した教員たちにとって、これは失敗事例となる。

もしくは、同様に中退の可能性が出てきたとき、教員は「義務教育ではないのだから、来たくない者は来なくてもよいのではないか」と判断、特に手厚いケアをすることもなく欠席日数が超過し、学校を継続しづらくなり、結果的に退学へと「事務的に」流れていく、ということもあろう。これも失敗事例ではある。しかしあくまでも義務教育ではなく、そもそも今の学校に通い続ける適性がなかったのであり、ここを選択したことが間違っていたのである。よって生徒・学生本人の責任であり、残念ではある

が仕方がないことであると見なされる。

これらは「学校に来ないことはよくないことであり、そのような生徒・学生は望ましくない状態にある」という捉え方である。それ以上でもそれ以下でもない、閉じた存在。しかしながら Frankl 的には、全く別の捉え方があり得る。肯定的なものとしてある。この中退は本人にとって肯定的な意味のあるものと捉えることができるかもしれない。より適性のある別の場面へステップアップする機会でもあり得る。今までのとてもストレスフルな状況からやっと脱出できるのかもしれない。これまで周囲に流され続けてきたのが、ここへ来てついに、中退を望むという形で主体的に自己表現できるようになったと見なすことも可能である。であるのならば教員は、このあり方を肯定的に意味あるものとして把握し、当該生徒・学生に肯定的評価を与える必要が出てくる。

そしてこの生徒・学生は、様々な互いに矛盾する面をいくつも持っている。教員の前、家族の前、友だちの前、知り合いの前、知らない人の前等々では、それぞれ全然違う顔を見せるのであり、その違う顔は、例えば教員は生徒・学生が友だちに見せる顔を絶対に見ることはできない。それらの多様な顔を重ね合わせたものを超越したところの立体として、その生徒・学生の真の全存在があるのであろう。それは様々で互いに矛盾する側面を持っているが故に、様々な可能性を秘めた、どのようにも育ち得る開かれた存在なのである。

### ② 「人生の意味」「意味への意志」「意志の自由」より

中退問題に直面した教員が、それを否定的に捉えようが、肯定的に認めようが、生徒・学生本人の人生は、Frankl 的にはそもそも絶対に意味あるものなのである。

そして人間には、無意識的であるかもしれないが、意味を掴もうとする意志が本来的に備わっている。中退しようとしている生徒・学生は、これも無意識

的であるかもしれないが、自分の人生を意味あるものにしようとして、中退という選択肢を取ろうとしていると言える。

当該生徒・学生は、様々な条件に囲まれている。やはり中退は損なのではないか、でもこのままここにいられない、学校には面白いところも嫌なところもある、止めてくれる友だちも勧めてくれる友だちもいる、教員は反対している、両親は「好きにしろ。でもやめたら仕事しろ」と言っている、仕事はしないといけなのだろうがまだその自信がない、等々。ではどのような決定をするか。どんな態度を取るか。他者がどのような助言をしようと、最終的には本人が決定しなければならない。そこは本人の自由意志によらざるを得ないのである。

この自由意志を持つ生徒・学生に対して、教員はその自由性を尊重しなければならない。教員がいくらどのようなアドバイスを与えたとしても、それを取り入れて中退しないのも、取り入れず中退するのも、態度を鮮明にせず欠席日数の超過を消極的に待つのも、どのような態度決定も本人にしかできないのである。人生において自由意志に基づき重要な態度をとろうとしている生徒・学生に対し、教員は重大な場面を共有しているという認識を持つべきであろう。結果、生徒・学生が、中退しようが学校に残ろうが、どう態度決定したとしても、彼ら・彼女らの主体的決定は尊いものである。

### ③ 価値実現より

人間には意味への意志が本来的に備わっているのであり、日々意味への意志を発動させながら生きている。そして人生の時間の流れにおける瞬間瞬間に、自由意志のもと何らかの態度を取り続けている。そこで何かを成し遂げたり、成し遂げられなかったりしてきた。それらの様々な体験が確実に蓄積されてきているわけで、よって我々は変化し続けている。人間は成長し続けていると言える。

このように変化・成長し続けるような、開かれた存在である生徒・学生は、中退した後何らかの価

値を実現する可能性があるのである。今ここで見えているような、変化しない閉じた平面図形ではない。教員はこのことを忘れてはならないだろう。

いずれ、何らかの事に専心し献身するようになるかもしれない。それは仕事かもしれないし、趣味かもしれない。それらに無意識的に入り込み、それらのことに全身全霊でなりきることで、結果として人生における価値を実現している、といった可能性がある。

また、誰か自分以外の他者が愛する対象となり、自分自身ではなくその他者のために何ができるか、という姿勢でその他者に無意識的に専心し献身するようになるかもしれないのである。それは自分のパートナーであるかもしれないし、子どもであるかもしれない。

中退をしようとしている生徒・学生は、このような可能性を秘めた存在であるということを、教員は忘れてはならない。中退はそのような人生の道程の中の一局面であり得るのである。よってその瞬間には大いに意味がある。

さらには、中退しようとしているときに、すでにその価値を見出そうとしている場合もある。学校の勉強とは別のやりたい仕事が見つかったから中退して進路変更したい、といったケースである。これについて、この生徒・学生の自由意志に基づく自己決定を肯定的に認め学校から送りだそうとする教員もいれば、それを「非現実的である」「ただ勉強から逃げようとしているだけ」と見なし否定する教員もいるであろう。しかしながらもし、実際単なる非現実的な逃避にしか見えない場合であっても、それは教員の観点から見た平面図形に過ぎないのである。悩ましいところではあるが、少なくとも価値実現の可能性があるということは、教員は常に頭の片隅に置いておかなければならないであろう。

## 事例からさらに考える

ここで仮想事例を設定し、Frankl 理論の視点からさらに具体的に検討したい。今回は、高校をまさに中退しようとしている事例を取り上げるが、同様のケースは大学でもあり得るものである。もし高校中退に至らず、そのまま大学に進学した場合、これは大学における事例となるのである。

### 事例 A 高校1年生女子

いわゆる教育困難校に通う。校内での成績はトップクラスであり、教師たちからの期待は大きかった。入学直後からアルバイトを始めるが、1学期後半、バイト先で知り合ったフリーターの青年(男性、19才)と交際するようになる。夏休みは交際相手のアパートに入り浸るようになる。2学期になり、登校しなくなる。やがて妊娠が発覚。高校をやめて、交際相手と結婚したいと言う。

両親はずっと不仲であった。父親(男性、35才)は飲酒時の暴言暴力がしばしばであった。女性問題も多かった。仕事も長続きせず、生計は主に母親(女性、35才)のパートで賄っていた。それでも A は所謂「いい子」であり続けた。両親の仲を取り持とうとしたり、家事を手伝ったりしていたが、不平不満を述べることはなかった。学校でも特に問題行動を呈することもなく、むしろ友だちも多く日々明るく過ごし、さらに成績も良好なため、当時の担任は特に問題を感じなかった。A が中学に入学した頃、母親はパート先の上司と交際するようになり、それが父親に発覚。暴力はエスカレートし、中3時に離婚が成立、母親が家を出ることとなった。中2の3学期から成績は大きく落ち込み、離婚前後は学校を休みがちになる。家事の負担は A にかかってくるが、十分にこなすことはできず、食事は市販の弁当が多くなっていく。深夜に徘徊するようなことはなかったが、受験勉強に打ち込むこともできず、本来の志望校とは大きく異なる学校に行かざるを得な

った。

A は担任(男性、43才)とはあまり話をしたがらなかったが、養護教諭(女性、32才)は慕っていた。妊娠に関する相談も、まずは養護教諭に打ち明けた。彼女はこう語る。「彼氏と結婚してこの子を産みたい。私のうちは家族らしさが全然なかった。だから自分はちゃんとした家族を作りたい。子どもに寂しい思いをさせたくないから、一緒にいてやりたいから、学校はやめる。この子のために頑張りたい。この子を幸せにしてあげたい。そのためには何でもできる」。そして交際相手については、「私のことを初めて大事にしてくれた人。気持ちを全部受けとめてくれた。優しくしてくれた。だから私も大切にしたい。この人のために頑張りたい。二人とも若いし、彼もまだフリーターだけど、愛があるから何とかなると思う」。A はこれらについて、明るく前向きな表情で述べた。

父親は、特に反対することもなく、「高校は義務教育じゃない。好きなようにしろ」という感じである。担任は、「今の状態で結婚して子育てしていくなんてムリだ。現実を見ろ。若過ぎるし、経済的にも全く不十分だ。それに、君の学力だったら一定以上の大学にだって行ける。やればできるんだから。君自身のためにも、高校を続けるべきだ」と A の願望の非現実性を指摘し、登校刺激を何度も試みた。養護教諭は、やはり学校を続けてほしいと思いつつも前面には出さず、A の身体面のケアを優先させつつ、自身の意見を押しつけないように留意しつつ今後どうしていったらいいかを一緒に冷静に考えていく姿勢を維持した。

### 事例 A についての考察

かつて学業成績が優秀であった生徒が、成績が落ちて困難校に入学し、その学校では再びよい成績を取っていたにもかかわらず、妊娠を機に中退したいと訴えたのである。しかもパートナーは経済的に安定していないし、どのような性格で結婚についての程度覚悟を持っているかもわからない。A 本人

は結婚したいと言っているが、将来的に幸せになれる可能性は明らかに低そうである。これは大問題である。止めなければならない。しかも A は勉強を「やればできる子」である。それなりの大学にも行けるのである。ここはこの中退と結婚を望ましくないものと受け取り、何とか阻止しようとするのは、もっともなことである。しかしながらこの見方は、Frankl 的には一面的に過ぎない。

A は両親の不仲が続く中、不平不満を言わず、家事も手伝ってきた。そして高校受験勉強が始まろうとするときに両親が離婚、不登校傾向を呈するようになるも、生活が荒れることもなく、家事もこなし、学校では普通に明るく振舞っていたのである。実は口には出さなかったが、様々な否定的感情を抱き、それでもそれを言ってしまったら両親や教員たちに迷惑をかけてしまうから、言わずにいたのかもしれない。もしくは A にとってそのような家庭環境が通常であったため、それに対して特に明確な問題意識を持たないまま、しかし何らかのモヤモヤも感じながら過ごしてきたのかもしれない。もちろん否定的感情への強い抑圧が働いていた可能性は高い。

そのような様子であった A が、自分の人生の中で初めて、自らの思いと感情を表出し、行動しようとしている。大いに成長していると言ってもいいのではないか。これは A にとってとてもポジティブな経験であり、今ここで大人たちは、それをポジティブなものとして捉え、そのように A に伝え返す必要があるのではないか。恐らく A はこれまで、よい経験をした時に感じた肯定的な気持ちを大人と共有し、それをそれとして確認し、自己評価を高めていく、という経験を十分にしていないと思われる。だからこそ今、大人たちはこれを肯定する必要があるのではないか、とも考えられるのである。

この二つは互いに相容れない、異なる投影図としての平面図形である。どちらかが正解である、というものではない。ただ一般には恐らく前者の判断の方が多であろうし、それが全てであると錯覚されがちなのであろう。しかしそれは一面に過ぎない。誰かが肯定するべきであると思われる。

そして A は、未来に開かれた存在なのである。駄目な選択をしようとしているに過ぎない生徒でもなく、実は絶対的によい選択をしようとしている生徒でもない。A の全体像は知る由もなく、今後どのような人生を送っていくかは、両親にも教員にも誰にもわからない。A 自身の人生であり、どうにでもなり得る。悩ましいことである。例えば教員がこれを否定的なものに過ぎないというように見てしまえば、それに過ぎないのであり、教員は悩みようがなく、楽になることはできる。教員が楽になるために A を否定している、という言い方もできる。しかし本当は、悩ましいことなのである。

さらに、ここで明らかに A は、彼女自身の存在する意味を求めようとしている。これまでの生育歴のあり方を考えれば、「生きていても意味ないんじゃないか」と思うときがあってもおかしくない。そして今、生きる意味を掴もうとしている重要な時期であると判断することができる。

中退する、結婚する、出産する、パートナーと別れる、子どもをあきらめる、高校を続ける、アルバイトを続ける、大学を目指す、家を出る等々、A には様々な選択肢とそれらの組み合わせがある。これらから何を選び、どう態度決定するか。大人たちはそれぞれの観点から様々な助言をするのであろうが、最終的には A 本人の自由意志による決定となってくる。A のこれまでの人生において、最大の主体的態度決定の瞬間であろう。そしてそうしようとしているのである。これは尊重されるべきものであろうし、教員はそう認識しなければならないであろう。

さらに、A は今自らの価値を実現しようとしていると言える。自分ではない大切な他者である自分の子どもを愛そうとしている。自分が幸せになることを直接目指しているわけではない。自分の子どものためにでき得る限りのことをしてやりたいと強く思っているのである。すでに子どもに対して夢中になって専心し献身しようとしている。よって Frankl 的な価値の実現に向かっていると言えるのである。

A は自分の子どもだけでなく、パートナーにも同



様のあり方で愛を向けている。果たして彼も同様の愛を A に向けるであろうか。極めて未知数である。一般の大人の一面的な価値観においては、むしろ彼は A に依存しようとしていて、きっと A の負担は高まっていくばかりであろうから、結婚は思いとどまらせるようにしようとするのであろう。しかしながら A の人生であり、それは自由で開かれたものである。これからどうなるか、誰にもわからない。そのような中、今 A は彼女自身の価値を実現しようとしているのである。悩ましいが、尊重すべきところなのではないだろうか。

### おわりに

以上、予防ないし解決すべき否定的問題であるとみられがちな高校・大学における中退問題について、Frankl のロゴセラピー的観点に基づき検討し、中退は当該生徒・学生の長い人生における一つの有意義な経験となり得る、ということが確認できた。

高校・大学で勤務する教員にとって、学生相談、教育相談、生徒指導場面で中退問題を呈する事例において、あらゆる当該生徒・学生に対して中退することを推奨するという事は、あり得ない話であろう。そうなれば、内部にいる者が自ら、自分が所属する学校という存在そのものを否定することにつながり、よってそれは教員の自己否定へとつながってしまう。学校は生徒と教員がいるから成立するのである。

しかしながら、学生相談・教育相談・生徒指導は、今ここで可視化できるよい成果を上げたことをもって成功とする、という単純なものではない。あとになってじわじわ効いてくるものもあるだろうし、逆にあとになって嫌な経験に変わってってしまうこともある。

教員は、「目先の利益」に捕らわれてしまっはいけない。生徒・学生の人生一生のスパンで付き合

っていかなければならないと思われる。そのために、少なくとも Frankl のロゴセラピー的観点から、中退には別の肯定的側面もあり得るということ、教員は心にとめておかなければならないであろう。

### 文献

- 1) 文部科学省. “児童生徒の問題行動等生徒指導上の問題に関する調査”. 政府統計の総合窓口. 総務省統計局, (2017年2月28日).
- 2) 文部科学省. “学生の中途退学や休学等の状況について”. 報道発表. 文部科学省, (2014年9月25日).
- 3) Frankl, Viktor Emil, *The Will To Meaning: Foundations and Applications of Logotherapy, Expanded Edition*, A Meridian Book, New York, 1988, p.23
- 4) *Ibid.*, p.16.
- 5) Frankl, Viktor Emil, *Die Sinnfrage in der Psychotherapie: Erweiterte Neuausgabe*, Piper, München, S.106.